

野口英世の生涯

6 1 1 3 S T

(1) 野口英世 (1才～11才)

西暦 1876 年 11 月 9 日、福島県猪苗代町三城瀧で野口清作（英世の幼名）が生まれた。しかし 1 歳の時、母シカが目を離してしまったその時、清作はいろいろ落ちて大火傷を負ってしまった。そして、清作の手は棒のようになってしまった。清作は、三つ和小学校に入学する。そこで清作は、生長（生長とは学業の優秀な生徒が先生の代わりになって授業を行う役職のこと）になる。



(2) 野口英世 (12才～21才)

清作は、12才の時に三つ葉小学校を卒業し小林先生の援助の元、猪苗代高等小学校に入学する。清作は15才の時に、友人たちの寄付金で会津会陽医院の、渡辺鼎ドクトルに左手の手術を受ける。清作は猪苗代高等小学校卒業後、会津会陽医院に薬学生として入門する。清作は上京する前に家の柱に「志を得ざれば再び此地をふまず」という言葉を残した。清作は上京後、医術開業前期試験、後期試験にどちらにも合格する。清作は、英世と改名する。



(3) 野口英世 (22才～40才)

22才、牛荘に行き国際予防委員会中央医院に勤務。帰国、渡米。34才、日本より医学博士の学位を授けられる。そしてメリーダージスと結婚。36才、ヨーロッパ各地に講演旅行に行く。38才、一時帰国。

(4) 野口英世 (41才～51才)

41才、エクアドルのグアヤキルに黄熱病の研究に行く。病原体をわずか9日で発見。母シカが亡くなる。42才、黄熱病研究の為メキシコ、ペルー、ブラジル、ガーナへと移る。しかし51才、ガーナのアクラで皮肉にも博士自身が黄熱病にかかり逝去。

まとめ

ぼくは、野口英世は人のために生きた人だと思いました。なぜなら自分の身を、犠牲にしてまでも黄熱病の研究をしたからです。ぼくは野口英世のような偉人を手本にして生活していきたいです。